

昭和 50 年 3 月

# 余目町梵天塚遺跡発掘調査報告書

財團法人  
山形県埋蔵文化財センター



6-0000-462-01

酒井忠一  
佐藤慎宏  
小野忍



山形県余目町教育委員会

## はじめに

余目町教育委員会教育長 佐藤菊磨

払田山（梵天塚古墳）は、私ども子ども時代（明治末期から大正の初期にかけて）を近くで過ごしたものにとっては、忘れない出来事の丘あります。

それは、私の家（館）から農道沿いに1キロ程の所にあり、平坦地の中に只一つ盛り上がった丘で、菜の花畑から、はるかに広がる麻畑や麦畑等四季折々の景観が、この丘に登れば一望に見わたされたからです。

それに、ここから南300メートル程の所には払田松（現在県指定天然記念物）があり、周囲は一面の草原であり、戦争ごとに恰好の場所がありました。日曜日や夏休みには、一部落だけでなく、数部落が連合しての大がかりな戦争ごっこが行なわれることもあって、周辺部落の当時の魄とものにとっての思い出の丘でもありました。それに、余目小学校の春の遠足には、ほど良い距離にあるところから、この丘の上で小休憩して、近くの長畠部落の阿部善兵衛氏の庭園で昼食を取るのが年中行事の一つとなっていたものでした。

その後、周囲の模様も麻畑から麦畑やそば畑に、そして蔬菜畑へと変り、丘もその上に大きなエノミの木1本しかなかったものが、いつの頃にか松の木が植えられ、近年では丘の上に花見の客の姿も見られる程立派な樹となっております。

丘の南側の農道も町道として子どもの頃の曲りくねった道から直線の路に改修され、更に50年度には12メートルの巾員をもつ都市計画道路として拝門舎表工事が計画されることになりました。

そこでこの丘は、昭和37年の山形県埋蔵文化財包蔵地調査に梵天塚遺跡として遺跡番号1256号で登録されていることもありますし、本町としても昭和47年に文化財保護条例を制定し、文化財の保護に努めているところであります。今般の道路整備事業により貴重な遺跡が棄損されることのないように、またこの遺跡の文化的価値の学術的究明の必要を考え、昨年以来酒井忠一氏を団長として、庄内考古学会の方々にその調査をお願いしたところであります。

このたび2度の調査の報告を戴きましたので、広く町民各位のご理解を戴き、今後の保存に意義あらしめたいとの考え方からこの小説としたところであります。

最後に、2回に亘り厳寒の中、風雨の中、竹へラをたよりに調査の労をとられました調査員各位と、梵天塚古墳と命名下さった柏倉名譽教授。それから数百年に亘る長い年月、遺跡の保存に尽して下さった払田・南口両部落の皆様、その他関係各位に厚く感謝申し上げる次第であります。

# 余目町梵天塚遺跡



右:遠景(北西より)

下:近景(北より)

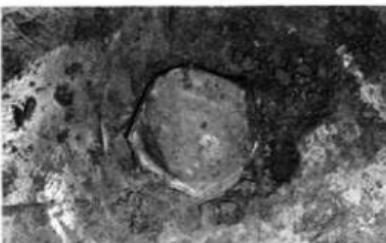


左中:2トレス

左下:6トレス段状掘り込み

右上:4トレス出土の須恵器

右下:4トレス出の須恵系土器



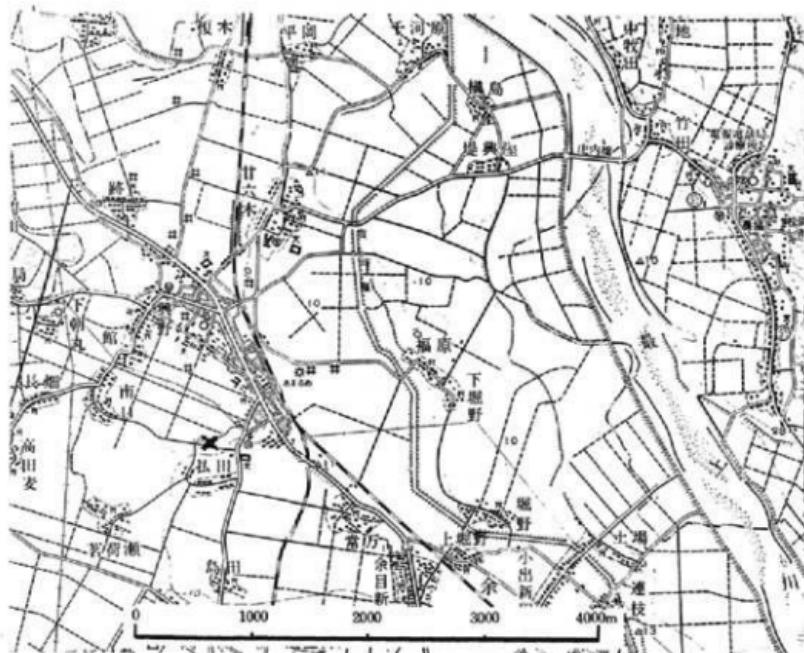
# 余目町梵天塚遺跡発掘調査報告

西井志一・佐藤貞云・小野忍

## I

梵天塚遺跡は山形県東田川郡余目町大字余目字上梵天塚29、29-3、30-1、30-2、32-1、32-2、60、61に所在する。地図は畠地・道路・雑種地などであり、現存する墳丘は30-1、60、61の地番部分である。墳丘の南側29-3、30-2、32-2はすでに町道として墳丘の一部を削って拡幅されている。

梵天塚遺跡の山形県遺跡番号は1256で、平安時代の墳墓として登録されているが、正式な調査を



第1図 梵天塚遺跡付近の地形 (X印が遺跡)

実施したことはない。

余目町は庄内平野の中央部にあり、県下でも山地のない珍しい町である。北上する羽越線が最上駅を経て西下した陸羽西線と余目駅で合している。遺跡は余目駅よりわずかに 0.8 km 程南西方向にある。現在平出に見える遺跡周辺の地勢も、続地整理以前は東から西へ緩慢な傾斜をもつ、特に遺跡所在地附近は自立って舌状に張り出すような餘高地であったらしい。今でも周囲の水田より 1 口の比高の地に立地している。また水田は少しづつ塗を消し、宅地化現象が急激に進行している。

埴丘は長軸を東西にとりその長さは 32 m、南北の最大幅は 15.2 m、最大高さは 2.8 m で口を円にもつ壠形を呈している。標高が 9.5 m の地にこのような小丘が存在することは近辺でも稀でよく目立ち、古くから親しまれてきた形跡がある。梵天塚の由来は明らかでないが、地名と同一で、この西方にも上梵天塚と呼ばれている。また俗に上入塚と/or/正直山と/or/呼称され、近年標の山公園という様式を立てて子供の遊び場として開放された。

ところが余目町の市町村計画で余目駅梵天塚線として道路整備事業によって、さらに埴丘の南側が欠損されることが判明した。この事情が直ちに町土木課より町教育委員会へ、そして県文化課へ報告され、県文化財巡回調査員として佐藤が現地を踏査したのは昭和 49 年 1 月 22 日雪の中であった。以後一部破壊の是非よりも性格识别のための手掘調査の必要性を提起、町当局の善意によってそれが実施されたのが同年 5 月 3 日～6 日である。この 74 年の発掘調査のとき 50 分の 1 の地形図が作成され、埴丘が脈絡法を用いた盛土であること、埴丘根部に溝状構造が存在すること、1 個壠石状の河原石が存在することなどが確認され、古墳の可能性をもつて至った。また埴丘下部が道路下にも及ぶことが確かめられた。その後余目町は埴丘の現状を保存するように努力され、埴丘南側の道路部分を未採査としたのは同年 12 月 6 日～15 日風雪の中である。この 79 年の調査によつて 4 カ所にわたる掘り込み遺構などの新たな事実が検出され、遺跡の性格に波紋を投じることとなつた。以下は 2 度にわたる調査の報告である。

なお発掘調査は調査委員を組織して実施し、團長を酒井忠一として佐々木七郎・佐藤寅宏・小野忍・小野一彦が調査にあつた。5 月には柏原亮吉・川崎利夫両先生の指導を受け、12 月は東海林次男氏の協力を受けている。また町教育委員会の佐藤喜代治指導課長・日野津社会教育主事からは誠心誠意なる好意を授かった。特に梵天塚保存のため、調査実施のためのご努力は高く評価するとともに、深く感謝したい。2 度の調査には次の方々が参加し、調査に協力していただいた。銘記して感謝したい。(佐藤 植宏)

斎藤芳秀・酒井英一・加藤惣太郎・宮澤さき・伊与田陽子・斎藤和子・佐藤正雄・斎藤正子・梅木俊明・池田徳右衛門・石井末歩・池田春治・池田百合子・佐々木弘・酒波豊助・佐々木重謙・阿部兵一・池田繁子・橋渡真須子・斎藤たみ・小野幸子・寺田司子・金子美穂子・五十嵐則子・伊藤安子・常盤純子・高野一株・海野さだえ・吉川ゆき・渡辺秀・佐藤さち子・村上志子・石川文子・土田健子

## II

### 構造

梵天塚遺跡の周辺は、急激な宅地化現象で旧來の面影を失いつつある。しかし、本末の梵天塚遺跡は、周辺の旧田面から約 1 m ほどの高さをもつ丘状の餘高地に立地している。発掘調査にさきだって、昭和 49 年 4 月に実施した 1 / 50 の地形測量調査の結果、当小丘の現形は次のように観察された。現高 2.8 m (標高 11.72 m)、長軸は東西にと 2.32 m、最大幅は東半分にあり 15.2 m をはかる。地元の古老的な話によれば、小丘はもとより南へ張り出していたというが、南側土町道によつて削り取られ、あたかも瓢箪を二分したかのように見える。頂上部は平坦ながら東西へ緩かに傾斜している。また、頂上平坦部の北東側および北西側において、20 cm 前後の河原石群が認められた。しかし、小丘を模倣する第 2 レンチ等では検出できなかつた。小丘の縁辺部は、急変換して崖状となり、丘根部へと続く。東部は緩やかな斜面をなし、一部小テラス状になつてゐるが、これは一時的にとして切り取られたためである。このことは、発掘による断面観察でも明らかにされた。なお、裾部周辺、現在も畠地となつてゐる。

次に、昭和 49 年 5 月(予備調査)と同 12 月(第 1 次調査)に実施した発掘調査の結果について述べたい。

今回の調査は、土木工事に伴なう緊急調査のため、その目的として

- ① 梵天塚遺跡の小丘の現形をとらえる。
- ② 当小丘が人工作であるか否かをとらえ、その成形および構築状況を確認する。
- ③ また、これと並行して、小丘の周間にいかなる施設があるか確認する。
- ④ これらのことから、梵天塚遺跡の年代や性格の一端をとらえ、今後の状況へ対応する資料を得る。

の四点にしぼつた。

以上の目的を果すために、小丘上および小丘周囲に、幅 2 m、長さ 4 ~ 15 m のトレンチを 7 本入れ調査を実施した。発掘面積は約 159 m<sup>2</sup>。発掘の結果、現小丘は、後世の入びとによってかなり原形を崩されていることが知られた。例え、東側のテラス状の小平坦部は小丘を切り取り畠地とし、南側は道路として削られ、南西側では逆に後世の排水土・隣芥割が厚さ 80 cm ほどにわたって積まれていた。さらに、丘の一部は墓地にもされたことがあるという。

各トレンチでの断面は、複雑な構造を示している。しかし、基本的な層序として次の四層に大きく区分される。第 I 層は表土で耕土なしし複数の土層、第 II 層は新日曆の崩土層、第 III 層は小丘の主体をなすもので、木炭片等を含む多種類の粘土が 5 ~ 23 cm の厚さで互に交差する層、第 IV 層は地山である。第 IV 層は、土質・色調・含育物等で細かに分けられた暗褐色粘土・黃褐色粘土・茶褐色粘土・灰白色粘土・黑褐色粘土あるいは木炭片やこれらの混合した粘土等が互層している。特に、第 2・3・4 レンチでは、現地表下 50 ~ 100 cm から最高二十五枚余にわたる厚さ約 2.8 m の淤泥状況が観察された。小丘の裾部に設定した他のトレンチでも厚さの差こそあれ、ほぼ同様な状況を示した。また、第 4 レンチの版築の下部砂層から、須恵器小片(瓶?)が出土して

いる。これらのことから、当小丘は人為的な構築物であることが認めできた。

小丘の裾部付近においては、溝状造構あるいは掘込造構が検出された。溝状造構は東側(第1トレンチ)及び北側(第3トレンチ)で検出。幅30~100cm、深さ20~40cmを計る。東側側は南北方向であるのに對して、北側側は東西から南へ弧形に曲る。調査区域と田所の關係から河に追求できなかった。小丘を形成する版築層の粘土は、溝状造構をおおい、その外側で止まる。また、掘込造構も、小丘南側の町道敷内で第4~7トレンチにかかって東西に並んで4例認められた。一段掘りの跡と二段掘りの跡とに区分できる。東側2例は二段に掘り込まれた形態で、第1段目の深さ15cm前後、第2段目の深さ15cm前後、長さ6.9~6.6mをはかる。西側2例は一段溝の形態となり、深さ15~30cm、長さ4.6~5m。いずれも、南側のみの検出で完掘されておらず、南北傾斜不明である。南北長が最も長い第5トレンチの西側例では1.9mあり、その他も1.1m前後であることから、版築層の中にさらに入り込むものと推定される。版築は、掘込造構の基底部分はじめられている。また、版築層の西および南限界は、掘込造構の外2m前後にある。なお、溝状造構は既に判明したものとし、その不明なものを掘込造構とここでは便宜上称した。しかし、いずれも当小丘を形成することに関わる施設と推定し、基底部から版築層の粘土が入っていることから、他と区画したり、墓壇とするにつれては保留しておきたい。また、この施設が即ち小丘形成にかかわるものとすると、本来の形態は長軸を対象線とした瓢箪形とはならない。西および北西部が未調査であり、版築層の下部が不明確であるため、原形については今後の課題である。なお、現状におけるこれらの造構から推定される小丘の規模は、東西28.2m、南北19.6mである。

その他の造構として、小丘から幾分離れた第5トレンチの一部に溝状造構を検出した。現長1.2m、深さ20cm。埋土は、暗茶褐色粘質土で、上部に須恵器土器片を若干含む。また、この直ぐ北側で、小丘崩壊土の下層から須恵器や須恵器土器が集中して出土している。完形品ではなく、いずれも破片である。

小丘の性格・年代については次章で触ることにして、次に出土遺物について述べる。

#### 遺物

梵天塚遺跡から出土した遺物は、須恵器および須恵器土器などの土器である。出土数は少なく、総数83片ほどである。そのうち、第5トレンチ内が64片で大半を占め、次いで第7トレンチの14片である。器形では、壺形土器が大半の58片で、杯形土器がそれに次ぐ。また、器種では須恵器土器が大半を占めている。

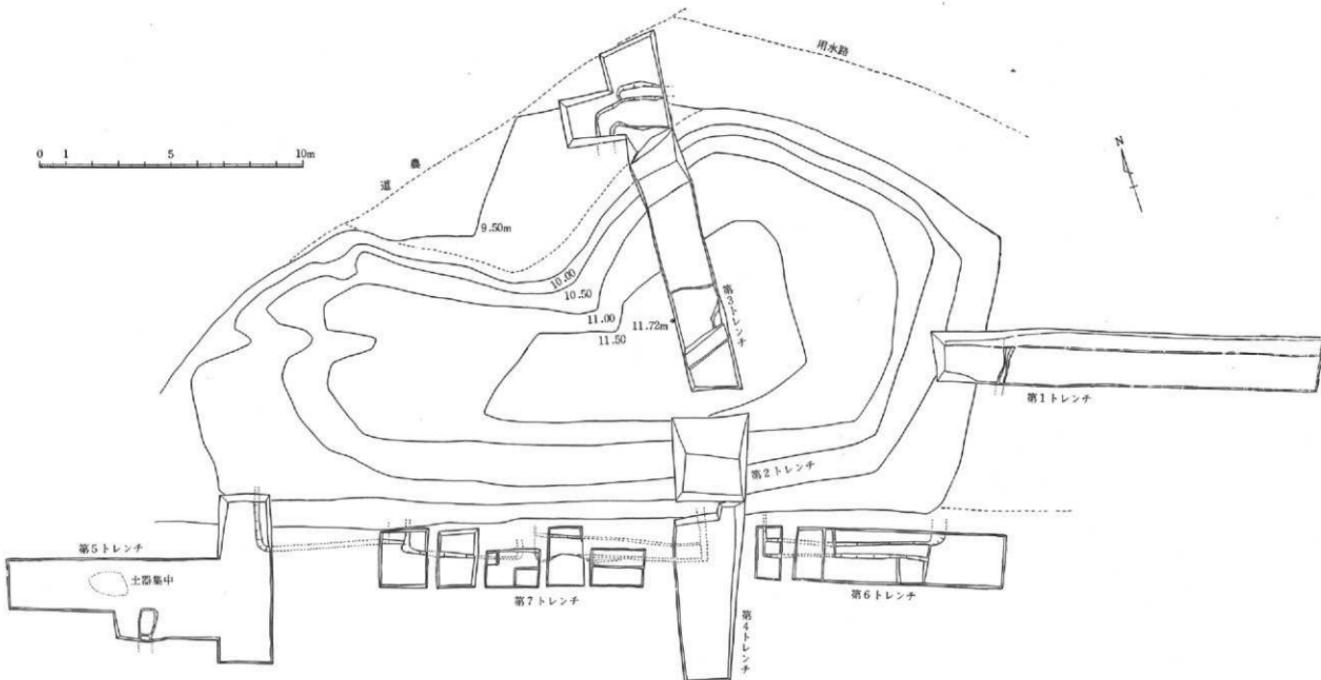
梵天塚遺跡出土の土器はほとんどが小破片で、そのうち完化し得たのは13例ある。器形によって壺形土器、壺形ないし鉢形土器、盃形土器に分類される。以下、順次各器形毎に概観していきたい。

#### 壺形土器

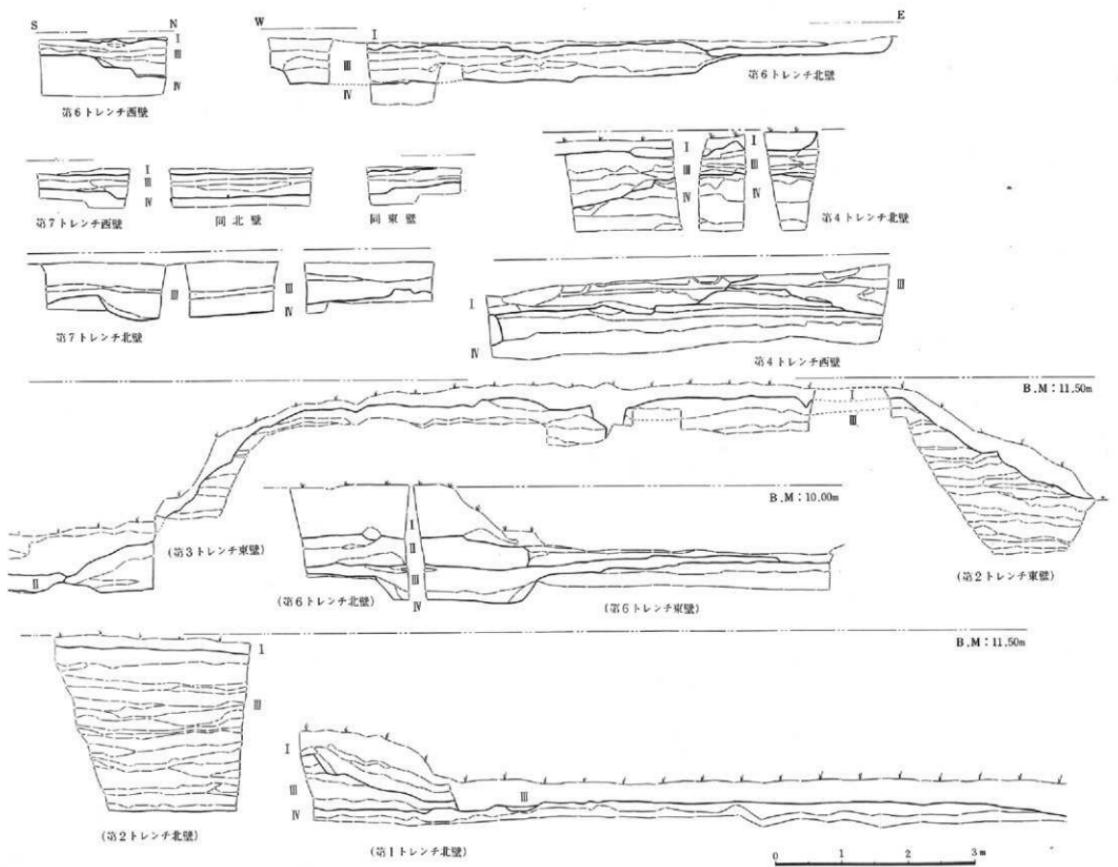
2番目に多く出土している。完形品ではなくいずれも破片である。器種および形態から5つに細分できる。

##### I) 壺形土器第1類

須恵器壺の底部小片である。1点のみ。第3トレンチ小丘頂の第I層内出土。底部下面に回転ヘ



第2図 梵天釋現形実測図



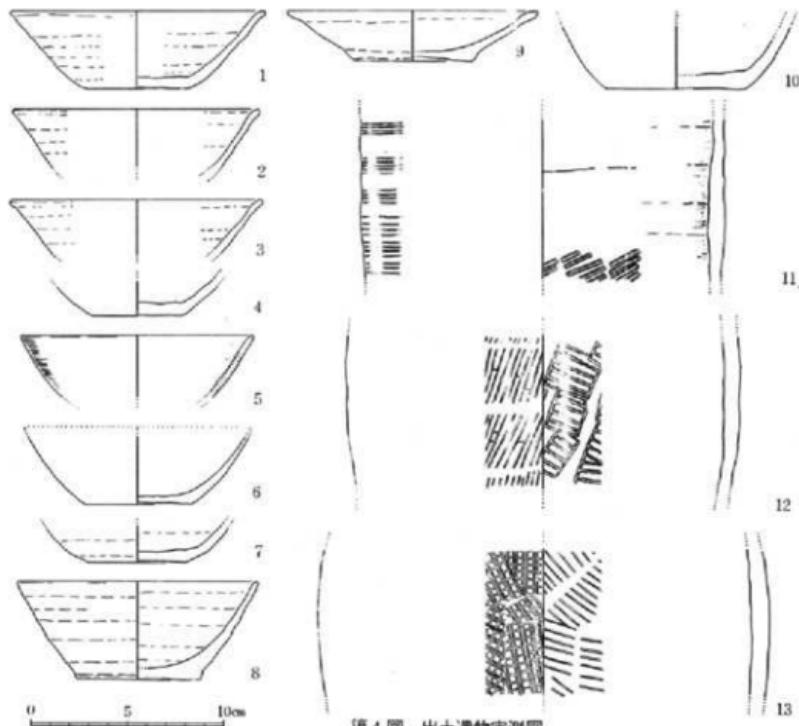
ラキリ痕を認める。体部と底部との界は丸味をおびる。砂粒を含むが、胎土は緻密で硬い。焼成も良好。

### II) 坯形土器第2類(第4図1~4)

図示した4例が本類の代表器である。いずれも第5トレンチ内出土。口径12.6~13.2cm、器高4cm。底部は平底で、下面に時計逆方向に収束する回転糸切り痕を認める。緩かに立ちあがる体部は、口縁部でわずかに外反する。口唇端部は丸くおさまる。砂粒を含むが、胎土焼成は良好で硬く緻密である。淡灰青色ないし青灰色を呈する。

### III) 坯形土器第3類(第4図5~7)

須恵系土器1品で17例出土。いずれも第5トレンチ内出土。口径11.8cm前後、器高4cm前後。淡黄褐色ないし暗灰褐色を呈し、胎土は不良で軟かい。(5)例は、胎土が良好で淡白黄色を呈する。内外面にヨコナデが著しい。口唇端部は丸くおさまる。底部は平底で、回転糸切り痕を認める。体部と底部との界は丸味をおびるが、(7)のように切りはなしのままのものもある。



第4図 出土遺物実測図

#### IV) 环形土器第4類(第4図8)

1例のみ、第5トレンチ出土。口径12.2cm、器高5.1cm。底部は平底で、時計逆方向に收束する回転糸切り痕を認める。体部は幾分内側し、口唇部は丸くおさまる。底部の縁辺は整形されていない。胎土は砂粒を含み良くなないが、焼成が良好で硬い。明褐色を呈する。

#### V) 环形土器第5類(第4図9)

1例のみで第5トレンチ出土。口径12.8cm、器高2.6cm。砂粒を多く含み、胎土・焼成不良。軟質、器面は著しく荒れている。淡灰色を呈する。底部は、上底状になっている。小形皿の形態であるが併せて分類した。

#### 壺形土器

須恵器広口壺の口縁部を参考される。第5トレンチ出土。口縁端部は、外側につまみだしがあり、短かく剛な形になっている。暗青灰色を呈する。外面に自然釉が付着している。

#### 壺形土器(第4図10～13)

壺形土器は、最も多く出土し58片を数える。全形の知れるものはない。須恵器を若干ながら認める。須恵器以外は全体的に、胎土・焼成は良くない。器面が荒れ整形痕の不明なものが多い。赤褐色ないし淡黄褐色を呈し、施い。底部は平底。体部は長脚の形態をとり、径19～23cm・厚さ5～7cmを有する。口縁部は体部から大きく「く」の字状に外反して開き、また端部で短く立ちあがる。体部の外面には、横位の条痕ないし縦位の平行状、あるいは梯子状即ち網目を認め、内面には横位ないし斜位の平行状板痕を認める。輪筋痕を残している例もある。

#### 壺形土器

第4トレンチの小丘を形成する版築積層から検出された。青灰色を呈し、胎土は緻密で硬い。縫合部片と推定されるのが定かにし難い。

以上、梵天塚遺跡から出土した土器についての所見を簡単に述べた。これらの土器は、先述したように各トレンチの埋乱層あるいは第5トレンチの西側から主に検出している。特に第5トレンチでは、小丘崩壊土下からほぼ一括して出土している。

出土した土器の特徴をまとめれば次のとおりである。(1) 环形土器第1類は窓切り痕を認め、底部の縁辺は丸味をおびている。いわゆるAタイプあるいは6～8類に相当する。(注1)。

(2) 第2類は回転糸切り痕を認め底部の縁辺は丸味をおびている。10～10b類は、須恵系土器で回転糸切り痕を認める。いわゆる10a・10b類に相当する(注1)。壺形土器は長脚形で口縁部が体部よりも大きく外反する。土器の第7型式に相当する。(注2)

以上のことから、(1)第1類は9世紀後半に、その他は10世紀から11世紀に位置付けられよう。

( 小野 忍 )

(注1) 関田茂弘・佐々木茂祐・桑原滋郎「長根鷹跡跡」(1972)

関田茂弘・桑原滋郎「多賀城周辺における古代环形土器の実態」『研究紀要』

(1974)

(注2) 氏家和典「東北土器の型式分類とその編年」『歴史』第14輯(1957)

#### III

今回の発掘調査によって、梵天塚遺跡の小丘が二十五枚余にわたって版築された構築物であることが確認されたことは、大きな成果である。また、小丘の現形は盤面を二分した形状を呈している。しかし、現小丘南側の道路敷を調査した結果では、北側の形状と対象形にはならない。すなわち、1/50の地形測量調査時に想定したような「前方後円墳」形にはならない。その上、後世の削削によって、原形がかなり損なわれている。また、小丘堆積付近で検出できた溝状あるいは断込道路が現丘形成に関わるものであれば、南・東および北側東半分は直線になり、(既)方形の一端をなすことになる。規模は、東西28.2m、南北19.6m、高さ2.8mと推定され、現形よりも長軸が短かく短軸が長くなる。しかし明確な原形を復原するには、現時点では困難で、今後の調査測量として残った。さらて推進装置あるいは掘込道路についても、小丘形成に関わる施設と想定しているが、その規模の把握と合わせ今後の課題である。梵天塚遺跡の性格についてあるが、今調査によつては性格を決定することはできなかつた。しかし、版築によつていることから、埴輪・墓基・土塔などを考えられる。そのうち後二者については、それに伴う他の施設が甚無い点から除外である。前者についても、なんらの根拠もないが、中世墳墓などに、時折版築したのが見られるところから、埴輪の可能性がある。なお1963年版、山形県遺跡地名表(注1)では平安時代の埴輪としている。年代については、遺跡の崩壊土をかぶっている土器が10～11世紀であるので、これを下限とした年代が考えられる。上限については、版築から出土した埴輪須恵器小片の年代であるが、幅面上の位置を定め得ず不明といわなければならぬ。ここでは、遺跡の年代を中心まで下らないものとしておさえておきたい。今後全面的に調査する必要がある。

( 沢井忠一・佐藤清宏・小野 忍 )

(注1) 山形県教育委員会「山形県遺跡地名表—埋蔵文化財発掘地一覧—」(1963)